

# 〈学習支援・教育開発センター 授業デザイン研究会〉 日頃授業について考えているあれこれ ——1年生のデータサイエンス科目を中心に——

講師：大森 崇(同志社大学 文化情報学部 准教授)  
宿久 洋(同志社大学 文化情報学部 教授)

## 大教室での参加型授業の試み 教えるより、学び合う場を創ろう！

講師：中野民夫(同志社大学 政策学部 教授)

日時：2014年12月12日(金) 18:20~20:00

場所：今出川キャンパス 寧静館会議室

京田辺キャンパス ラウンジ棟207会議室(テレビ会議システムによる配信)

※肩書きは研究会開催当時

山田礼子 学習支援・教育開発センター所長：

学習支援・教育開発センターの山田です。今日は講師の先生方をはじめ、参加者のみなさま、初めての試みであります授業デザイン研究会にご参加いただき、ありがとうございます。学習支援・教育開発センターでは、これまでさまざまなFDに関する取組の紹介、講演会を開いてまいりました。その中で気がついたこととして、同志社大学が大きな大学でもあり、学内にさまざまな授業のノウハウや新しい試みをされている先生方がいらっしゃることに気づきました。そういう資源を大学の財産として使わせていただき、先生ともどもフラクにできる授業を、新しい方法を学びあう機会を提供していきたいと思い、今回の授業デザイン研究会を開催させていただきました。今日、お話いただく文化情報学部の大森先生、宿久先生は大規模クラスでの試み、政策学部の中野先生はワークショップ型の授業の提供をされています。そういう授業の工夫は、大人数の教室の中で行うものや学生たちがしっかり学習成果を身につけるアクティブなラーニングを工夫していく上で、いいヒントになるのではないかと考えております。私は高等教育が専門の研究者で、大学教育学会にも属していますが、この学



会は毎年、参加者数、会員数が増えています。それは授業のノウハウ、効果の測定など、さまざまなヒントを得られる機会があるからだとすることで、今の日本の大学ではアクティブ・ラーニングをどうやって学び、学生たちに還元していくかに大変な関心が広がっている現状ではないかと思えます。そうしたすばらしい機会を提供していただける先生方に、この場を借りて御礼を申し上げますと同時に、ぜひ、フランクに互いに学び合うことで、今日は話しあっていただければと思います。それではどうかよろしくお願い申し上げます。

## 日頃授業について考えているあれこれ ——1年生のデータサイエンス科目を中心に——

文化情報学部 大森崇、宿久洋

大森崇 准教授：

皆さん、こんばんは。文化情報学部の大森です。今日は宿久先生と一緒に我々が取り組んでいる授業を話題提供として紹介させていただければと思います。とはいえ、体系的に何かができているわけではないので、日頃、バタバタしているものをご紹介しますさせていただくことになってしまいます。

私たち文化情報学部は同志社大学で9番目、今年で10年目を迎える学部です。他学部と違う特徴は文理融合型の学部だということで、それを売りにしています。ですから文系受験も理系受験も行っています。さらにAO入試とAO入試に似た公募制入試があり、そして指定校推薦もあります。もちろん内部校からの学生も来てくれます。こうして多様な学生たちが集まってくる学部となっています。1学年が定員280人。文化を人間の営みとしてとらえ、様々なことに関心を持ちながら、キーワードとしては「データサイエンス」を売りにして、それを学ぶということでやっております。今日、お話しするのは1年生のデータサイエンスの科目です。教員にとっては、キーワードになる非常に責任の重い



話題提供

### 日頃授業について 考えているあれこれ

——1年生のデータサイエンス科目を中心に——

同志社大学 文化情報学部

大森崇、宿久洋

2014年12月12日 授業デザイン研究会



科目です。

今日のアウトラインはスライドの通りです。まず話の対象となる1年生の授業を紹介します。そして私個人のデータサイエンス科目に対する想いをお話した後、今、グループワークでこの授業に取り組んでいることについて紹介します。そして私たち自身が学んだことと今現在思っていることについてお話ししたいと思います。

話の対象となる授業についてから始めます。1年生春からデータサイエンスの科目があります。「データサイエンス入門」という科目です。この授業の次の時間に「データサイエンス入門演習」という、コンピュータを使って情報処理教室で行っているものがセットになっています。これらの授業では統計学の中では記述統計といわれるグラフを描いたり、平均値を計算したり、基本的な統計学の内容を教えています。秋学期は「データサイエンス基礎」という授業があり、少しレベルの高い推測統計といわれる統計学の内容を1年生に教えています。この授業も続きの時間として演習の形で情報教室に行って学習する授業とをセットにしてカリキュラム上配置しています。セットの科目では、講義科目を受けた受講生はその後、必ず演習を受けるという形式で登録することになっています。「データサイエンス入門」も「データサイエンス基礎」もどちらも選択科目ですが、データサイエンスの学部ということで、結構皆さん、とってくださって、1年生の、定員280名ほとんど全員がとっています。毎年、うっかりとり忘れましてといって1人か2人いないくらいの人数の授業です。

1年生のみと言いましたが、全員合格とか全員Aはいなくて、留年する人もいます。そういう学生は、2年目に別の先生が行う同じ名前の授業を別クラスで受けています。4人体制でやっていますが、1人が2年目を担当し、3人が同じ教室にいるという配置で授業を行っています。

## アウトライン

- 1 話の対象となる授業
- 2 データサイエンス科目への想いと現実
- 3 グループワークを行ってみる
- 4 グループワークの力と課題
- 5 まとめむけて
- 6 おわりに

## 話の対象となる授業

- 1年春 データサイエンス入門(講義)  
 <データサイエンス入門演習(演習)>
- 1年秋 データサイエンス基礎(講義)  
 <データサイエンス演習(演習)>
- セットで登録する授業
  - 受講者は約280人(1年生のみ)
  - すべての科目を同じ3人の教員で担当
  - 4人目の教員が

講義の運営体制については、もともとこの授業は1人の教員が大教室で教えていたとのことでした。大教室ですから大変です。あまりうまくいかなかったようです。少しでも負担を減らそうということで、4人で100名弱のクラスで同じ資料を使い、同じ時間に授業をやる体制でもやってみました。私が赴任してきた時は、そういう体制でした。その後、1教室に入れてもいいのではないかとようになってきて、今は1教室に1年生全員を入れて教員3人が一緒にその部屋にいる体制でやっています。

文化情報学部のホームページから2013年のデータサイエンス基礎の授業の映像をダウンロードできます。これは授業をカメラで撮っていただいたものを3分程度にまとめたもので今日はそれを先に見ていただきたいと思います。

(学生が紙を手にして席を立てて前に持っていくシーン) これは確認程度の小テストで問いの答えができれば持つてくるようにして、助手を配置して前に机を並べて採点し、できなかったら突き返すという試みでした。ところが人数が多いので、並んでいる間に答えを教えてもらうということになってしまいました。まあそれでもその場で理解するならいいかと。(紙ヘリコプターを飛ばしているシーン) 私たちは紙ヘリコプターを使って実際にデータを測定することをやっています。くるくる回ってなかなか面白いです。ストップウォッチで滞空時間を計って、自分たちでデータを得ます。これができたら解析して報告書を作成します。解析手法を教えるのがメインですが、報告も重視するようになりました。セット科目の演習で情報教室に行ったときにe-class上にMS-WORDのフォーマットを与えてあり、それに従って書いていくというものにしました。情報教室が使えるので自分たちで報告書をつくれるようになりました。ちょうどこのシーンはレポートをつくっているところです。この学生はグループのメンバーに頼られていますね。こんな形でやっています。

## 話の対象となる授業

### 講義の運営体制

- もともと講義は教員1人が大きな教室で行っていた
- その後、教員3人がそれぞれ教室を分ける体制
- 現在は1教室に教員が3人

## 2013年度データサイエンス基礎

### 授業の様子の映像

<http://www.cis.doshisha.ac.jp/>

(キャンパスライフ)

2013年度「データサイエンス基礎」「データサイエンス演習」の授業の様子を動画(約4分、mp4ファイル33MB)に記録しました。文化情報学部生が、グループワーク・課題や実験に取り組む様子をご覧いただけます。



では、スライドに戻りましょう。ちょっと私の自己紹介をします。私自身、生物統計学が専門で今の授業も統計学の授業ですね。統計学は学問ではありますが、技術である側面も強く、その両面をいかに学生に教えるかが我々の課題です。私は厚生労働省で統計家として医薬品の審査をしていました。統計家が必要だということで働かせていただいていた。そこでいかに統計学が必要と思われるかを肌で感じました。その後、京都大学社会人大学院に行きました。そこは学部がなく社会人だけの大学院です。ここでは統計学を教えていました。社会人なのでモチベーションが高かったです。熱気がすごい。「会社を辞めてきました」という人たちなので「教えて、教えて」という感じです。そこで教えていて「もうちょっと基礎的なことを知っていれば応用できるのにな」という思いがあったんです。それは学部でしかできないことなので学部で基礎的なことも教えたいと思っていたところに、ちょうど縁があって同志社に来たんです。2010年のことでした。

2010年のはじめの授業の話をするね。このスライド絵はこの授業デザイン研究会のパンフレットにあった絵です。許可をいただいて、スライドに入れさせていただきました。この絵を見た時に「あ、2010年の俺がいる」と思ったんです。教壇の前に立って数式を示して説明している姿は、まさに僕自身だったと思います。自分で言うのもなんですが、丁寧に講義をしました。思いがありましたから。それをやっても上を向いて口を開けて寝ている学生がいます。寝ていてきっとカバンが開いていてもサイフなんかを取ってしまっ

## 大森の専門

### 生物統計学 (Biostatics)

- 統計学は学問であり  
技術・技能でもある

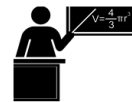
## 大森の経歴

厚生労働省で医薬品の審査、  
京都大学の社会人大学院を経て  
同志社大学へ

- 学部教育だからこそできることがある！

## 2010年のはじめの授業

教科書を行間を埋める丁寧な講義！



でも

- 上を向き、口を開けて寝ている学生
- まったく関係ないことを話している学生

授業評価は...「熱意」だけがやたらいい

も気づかないだろうなと思いました。暗い気分にもなりました。全く関係ない話をしている学生もいました。遅刻をしてくる学生も授業の回数が増えれば出てきました。その年の授業評価は「熱意」だけがやたらいい」というだけで、他は教員としてあまり嬉しい評価ではありませんでした。私たちの学部は非常勤の先生が試験をやる時には専任がつくということになっていて、期末試験の時に私も手伝いに行きました。試験が終わった後に「どうですか、うちの学生は」とある非常勤の先生のところに挨拶のつもりで行ったんですよ。突然、その先生の顔色が変わって「動物園かと思いましたよ」と言われてショックを受けました。専任としてとても恥ずかしかったです。「動物園か」と言われてしまったというのが、2010年当時の私たちの学部でした。教室が学びの場になっていないんだと、その時、強く思いました。何とかこれを学びの場にしなければいけない。でも現実には「静かにしなさい」と授業中に言わないといけない。いやなんですよ、不愉快で。どうすればいいのかと、興戸の前の田んぼで考えながら帰ったりするのが、また悔しくて「なんで俺はこんなことを考えているんだ」という気になりました。

だんだんヤケになってきて「もういいや、お前ら、話しておけ」と授業中に言ってみたらと吹っ切れた状態になった時、頭の中に「！」マークが出てきました。「さてよ、それはいいかもしれない。話せばいいじゃないか。グループで話せばいいじゃないか、グループで考えればいいじゃないか、そういう授業にしてみようか」というのが、今やっている授業のそもそもの発想なんです。山田礼子先生を前に大変失礼ですが、教育のことを知らなくて、後からPBLとか、反転授業とかは知りました。

結果、先程のような映像のようなことができるようになりました。もし、2010年の映像があったら外には出せないようなものでしたね。この試みを行って一番変わったなと思うのは受講者の顔です。現在、私自身は2010年当時のように教壇に立って丁寧に教えるという時に戻りた

### 2010年の話

教室を“学び”の場にしなければ

- 「静かにしなさい」と言わないようにするにはどうすればよいかを考え...
- 「もっと話しなさい」にしてみればと

**！ グループで話す  
グループ考える**

PBLなんて知らなかった...

12

### グループワークの導入へ

受講者の顔が変わった！！

- もう一方的な講義に戻りたいとは思わない

13

いとは思っていません。映像にあったように教室の学生たちの中へ入って行ってワイワイやる姿でやっていきたいなと思っています。

経済産業省が提唱する「社会人基礎力」というものがあります。グループワークを導入する時に後押ししてくれたのがこれです。3つの能力「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」、これが社会人として必要なだと当時、言われ始めていました。これを見た時、はっきり言ってこれは今の大学教育への批判だろうと思いました。そういうことがやれて

**大学教育へのメッセージ** 経済産業省

平成18年2月、経済産業省では産学の有識者による委員会(産長・藤村厚博法政大学大学院教授)にて「職場や地域社会で多様な人々と仕事をいくために必要な基礎的な能力」を下記3つの能力(12の能力要素)から成る「社会人基礎力」として定義づけ。

**<3つの能力/12の能力要素>**

**前に踏み出す力(アクション)**

～多岐に踏み出し、果敢としても粘り強く取り組む力～

【主体性】  
積極的な行動力

【働きかけ力】  
他人と働きかけを築く力

【実行力】  
目標を設定し確実に行動する力

**考え抜く力(シンキング)**

～疑問を持ち、考え抜く力～

【課題発見力】  
現状を把握し、課題を発見する力

【計画力】  
課題の解決に向けた計画を立て実行する力

【適応力】  
新しい環境に対応する力

**チームで働く力(チームワーク)**

～多様な人々とともに、自発的に助け合い協力する力～

【協働力】  
自身の業務以外の作業も協力する力

【信頼力】  
相手の思いや立場の異しを理解する力

【状況把握力】  
自分と周囲の人々の関係の状況を把握する力

【寛容性】  
相手の立場や考え方の異なることを容れ、お互いの成長を促す力

いない大学に対して社会の側からお叱りを受けているんだなということだと思ったのです。でも、これからやろうとしているグループワークにしてしまえば解決できるんじゃないかと思いました。自分たちで考えればいいじゃないか、どんなことがやれるのか、その中で授業中に話せばいいじゃないかと。グループで話しているから「チームで働く力」はつきます。3年生になって就活が始まって「先生、こういうのが私たちに必要そうです」と言われたって「その前にそういう力をつけておかないといけないでしょ」ということになるだけなんです。じゃあ、授業中に何をやっているか。教員が一方的に話していたら、ちっともそういう力は身につかない。この社会人基礎力の存在が当日相当、後押しになりました。

私たちがグループワークをやって4年経っています。新しくグループワークを始めようという先生方がいらっしゃったら、こういうことを考えておいた方がいいのではというのを次にお話したいと思います。まず「準備」。私はいかに教える知識を少なくするかが大切だと思います。私たちが教えている統計学は非常にたくさんの方を教えないといけない、とつい教員は思っていますが、最低ここだけ知っておけば役に立つよねというのは、それほど多くないと思っています。教える内容を減らすのが始めの転換の一点目でした。つい教員は話したがりの屋なので、授業中に言葉を声にします。言うてしまう

**グループワークを行ってみる**

**準備**  
教える知識をいかに少なくするか

**授業中**  
自分の言葉をいかに減らすか  
学生が話し合っているときに  
いかに待つか

のですが、その言葉をいかに減らすか。これも自分たちには必要なことだなと思いました。グループワークで学生たちが話している時、いかに待つか。教員が5分間黙っているのも結構難しいなど、やってみて思いました。でもそれでいいんだと思えるようにしないといけないなと今は思っています。

グループワークを盛り上げるための工夫がいくつかあります。この4年間、試行錯誤でやってきたんですけど、アイスブレイクは効果的だと思います。昨年くらいから導入していますが、結構大きいです。初めてグループをつくった時に「じゃあ、グループワーク始めるよ。はい、話してごらん」といっても学生の皆さんは話せない。私がよくやるのは「1月1

日から12月31日までのどこかの誕生日に皆、生まれているよね。学年は言わない、歳は言わない。どこかの月に生まれている。その順番ができるはずだから1月1日が一番にして12月31日が最後の日にしてグループの中で、その順番を言葉をしゃべらずに紙にも書かないでグループで順番をつけてね、はい、やってみよう」というようなことをよくやっています。キッチンタイマーは僕の道具の一つですが、3分経つと鳴ります。それが合図ですよ。それでお互いがちょっとわかる。その後に「明日食べたい夕飯なんだろうねと言いながら自己紹介してみてください」と今度は話すようにします。夕飯のイメージで一人ひとりの印象が残るので何となくグループが話しやすい空気がつくれると思います。それで10分、15分とっても大丈夫です。あとの盛り上がりを見ると、それが必要だなと最近、思っています。それからグループワークをしようと言って、これができると思ったのは、何も書くばかりではなくて、手で遊べるようなものをつくってしまうことができることです。グループワークを始めてから教材を作ることも意識するようになりました。「目標を書いてみよう」「反省を書いてみよう」とやって、次の回に「前回、こんな声があったよ」と紹介することも今年はやっています。そういう声を見せると「他の班はこうだったんだな」とわかりますし、「自分たちだけが、わからないのではないんだ」ということを伝えられると思います。あとは「先生はそれを見てくれているんだ」ということで信頼を得られるような気がします。それと統計学はついつい数式を解く話が多くなるのですが、数式を多くは入れないようにしています。私たちは文理融合学部ですので、それをやってしまうと理系

### グループワークを盛り上げる工夫

- アイスブレイク
- 教材を作る
- 目標や反省を
- リアルな声を紹介する
- キッチンタイマー
- クイズのような問題

20





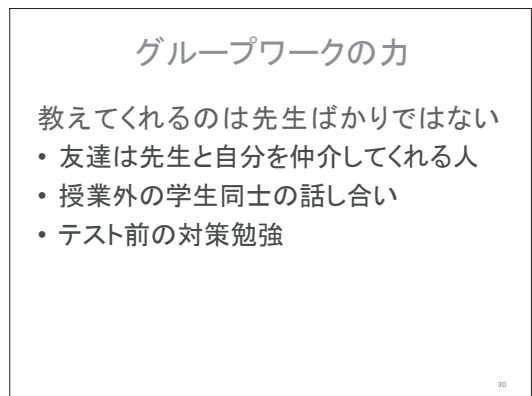
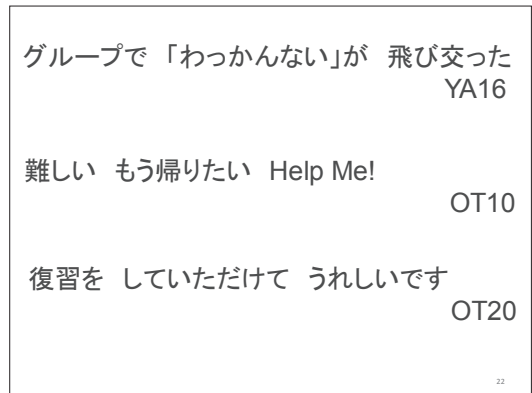
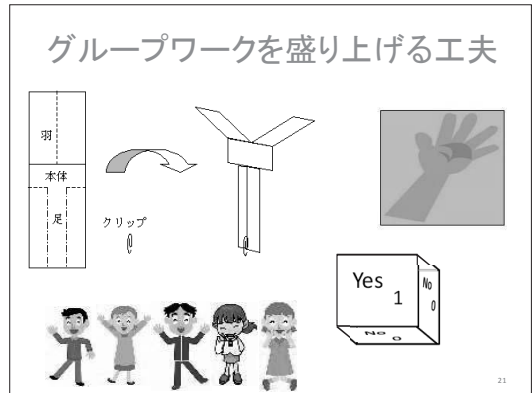
出身の学生だけができて、却ってグループの仲が悪くなるんです。答えが出ないような問題で「さあ、考えてみよう」というのを極力入れるようにしています。

これが、私たちが使っている教材です。先ほどの映像にもあった紙ヘリコプターは、2年生になると何も言わなくても作れる状態になっています。スライドにある手は、「中指と親指を使って机の長さを1人ずつ測ってごらん」というのに使っています。アツという間にグループの人数だけのリアルなデータができるのです。自分たちのデータが何の道具も使わずに得られるんですね。サイコロを紙工作でつくってコロッと転がすとかもやっています。こちらは授業の最後に回収するグループワークの紙に書いてある感想や反省です。書いてあったものの一部は次の週にフィードバックしています。たまには「五七五で書いてごらんよ」というと、こんなのが出てきました。「グループで「わっかんない」が飛び交った」「難しい

もう帰りたい Help Me」「復習を していただけで うれしいです」とか。「わからない」ではなく「わっかんない」と書いている限りは、大丈夫だなと思いながらやっています。うまく意思疎通ができているんですね。「手を挙げてごらん」とやっていますが、毎回挙がっています。今年は未だに挙がっています、すごいなと思っています。「そろそろ一番端で手を挙げている私たちをあててください」と書いてきたグループもありました。

こういうことをやってみて私たちが学んだのは、教えてくれるのは先生ではないんだなということです。よくわかりました。これはやってみただけにわかった

こういうことをやってみて私たちが学んだのは、教えてくれるのは先生ではないんだなということです。よくわかりました。これはやってみただけにわかった



話です。友達は先生と自分を仲介してくれる人なんですね。わかっている人が、それを教えてくれたり、「わかんない」というとそれを教えてくれる。授業が終わった後、ワッと集まって話している姿を見るようになりました。あとはテスト前の対策勉強をグループでやる姿も見かけます。グループの中で誰がわかっているか、皆、わかっているわけですよ。「誰々ちゃんに頼めば」という話が簡単にできる。そこもずいぶん変わったと思います。

グループの話も、よく感想で書いてくれます。「前回よりも分かり易く、楽しかった。グループメンバーに慣れてきたからだと思う」「難しすぎる。めーぶるさんの助けを借りました。友達っていいですね」とか出てきます。「楽しかった」と書いてくれれば最高ですよ。いいなと思います。「グループ1人減りました。なんとか連れ戻したい。目標は全員理解すること!」「難しかったので班のくくりを越えてみんなで話しあえてよかった。これからもみんなで協力していきたい」これらがリアルな声です。

このグループワークを始めて今年で4年目になりますが、3年生がこんなことを言っていました。「文情だとグループワークがやりやすいんですよ。他の学部の人と一緒に授業でグループワークをやるときには、相手のことを考えて話をしてくれる人が少なくて」と。他の学部とグループワークをやることもあるみたいですが、慣れていないために相手のことを考えてフォローしてくれないようです。グループワークに慣れていて、1人の人が仕切っている、その人を盛り上げることができるようになってきていることがわ

前回よりも分かり易く、楽しかった。  
グループメンバーにも慣れてきたからだと思う。

YA20

難しすぎる...。  
めーぶるさんの助けを借りました!  
友達っていいですね。

YA16

31

グループ1人減りました。  
なんとか連れ戻したい。＼(^w^)/  
目標は全員が理解すること!

OT25

難しかったので班のくくりを超えて  
みんなで話し合えてよかった。  
これからもみんなで協力していきたい。

OM19

22

## グループワークの力

### 受講後のたくましさ

文情だとグループワークが  
やりやすいんですよ。  
他の学部の人と一緒に授業で  
グループワークをやるときには  
相手のことを考えて話をしてくれる  
人が少なくて...

現在のある3年生

33



かって、嬉しかったですね。ただもちろん「グループワーク嫌いです。私はだめです」という学生もいます。その対応がこれからの課題です。今、できているのは「社会人基礎力」を紹介して「こう言われているから頑張っていこうよ」くらいしか言えません。いい案があれば積極的に使っていきたいと思います。

改善のための試行錯誤がいろいろあります。もともとこうやろうというデザインがあって、それを仕掛けているわけでは全然なくて、どちらかというとバタバタしながら「こんなことをやってみよう、あんなことをやってみよう」ということでやっているのが現状です。2011年は問題を入れた配付資料だけを作りましたが、それでは説明不足を感じるということで次の年は変えた資料をつくっ

てみるとか、毎年結果的には変わってしまっていて、今も定まった配付資料ができていません。2013年に先程の映像で見ていただいたように、小テストをやって、その場でチェックしてできなかつたら戻りなさいというのも遊び感覚でやってみたのですが、助手を導入したり、自分たちで○をつけたりするのも大変だったので今年を変えてみました。今年には班長さんに「スマホでアクセスしてね。e-classにいつてね」と言っ

### グループワークの課題

「グループワークは嫌いです」  
という学生への対応

- できているのは  
社会人基礎力を紹介してみる程度

34

### 改善のための試行錯誤

伝えたいことを伝えるために  
何を行うべきか

37

### 授業中の確認

2013年「カエレマテン」

- 試験とその場のチェック
- 採点のための助手さんの導入など  
大変だった

40

### 授業中の確認

2014年 班長さんのスマホでアクセス

- E-classに4択問題を仕掛けておいて  
授業中にアクセス、  
その場で自動採点
- あえて授業中にスマホを  
触るようにしてみるという試み
- 準備は大変だがたぶん来年も使える

41

ています。事前にe-classの中に4択問題を仕掛けていますよ。それをグループで解きなさいと。e-classは便利でスマホでもアクセスできて、自動採点もしてくれます。4択だったらすぐ採点できるので、授業中にスマホをいじっているなら、積極的に授業にしようということをやっています。それをさらに生かして今年の間にはこんなことをやってみました。90分を3つに分けて前半30分をe-classの4択で問題を解きます。これはグループワークではなく一人ひとり全員がパソコンの部屋にいて問題を解くことをやるというものです。10問全部できた時だけ「合格」と出るようにしておきます。合格と出なかったら、もう一回やり直していいというものです。それを30分やった後に一度終わりにして今やった問題を配って「ディスカッションしなさい」とやってみました。グループでワイワイやっていました。我々教員は見るだけで、その時間は何も教えません。後半30分は問題10問、全部入れ替えました。今度は合格も不合格も一切出ないという4択の問題です。このスライドがその結果です。始めの30分間は70点台がピークです。そうだったのがグループで話し合った後、最後が90点台がピークになりました。してやったりというデータです。そんなことができるようになりました。このデータは、グループワークで遊んでいるというだけではなく、ちゃんと学ぶこともできていることを示したエビデンスと思っています。

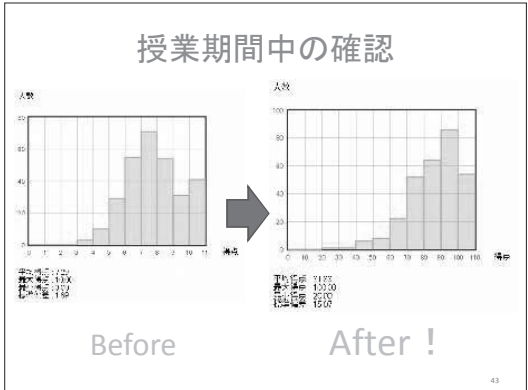
それから「報告書を書こうよ」ということを積極的にやっています。単にデータ解析ができるだけでなく、それを人に伝えるスキルをつけてもらいたいのです。私たちの学部は4年生で卒研が必修ですから、

### 授業期間中の確認

2014年 データサイエンス基礎中間

- 前半30分 E-Class 4択テスト (全問正解のみ合格と出る)
- 中30分に前半の問題を与えてグループワーク(教えることはしない)
- 後半30分 E-Class 4択テスト (問題はすべて変え、合格・不合格は一切出ない)

42



### 問題が解けるだけではなく

#### レポートニング

- 書くことに大切さをデータ解析を通じて伝えたい

報告書を作成してみよう  
データサイエンス基礎

44



そこに通じるようなことをやりたいと思っています。

結果的に4年前に始めた取り組みを、今、外に対して、言える自信がついてきました。教室はようやく学びの場になったのです。友達と教え合うということが、私たちが学んだことで、「これが私たちの学部の学生です」と言えるようになった気がします。また、「私たちの学部の学生

はチームでの活動ができます。データ解析の基礎知識と技能をもっています。解析結果を報告できますよ」というのを売りにできるのではないかという気がします。

そろそろまとめたいと思います。専門用語について話をしたり、考え方の式を板書して90分間を埋めるのは簡単なことだと思います。学生を無視すればですが。でも授業中に「なるほど」と納得してもらえように伝えるのは、とても、とても、とても難しいと思います。「テストあるから頑張っただけ」といってテストで頑張ってもらってもテストが終わると忘れてしまう。それは2年、3年、4年と積みあげることができません。社会に出たらまったく通じないことだと思っています。何とか授業中に納得できるようにしないといけないと思っています。そう考えると1年生はとても大切だというのが、よくわかります。初年次教育がどうして今、盛んにいわれているのか、身をもってわかる気がします。何が大切な

のか、テクニカルな話はどうだっていいのですが、授業環境をつくり、それを維持することが私たち教員にとって必要なことだと思っています。

私たちが、面白くない話を、面白くなく話すほど聞く側の者が面白くないことはあ

- 教室は“学びの場”に！
  - 友達と教え合う
- これが“私たちの学部の学生”です！
  - チームでの活動ができる
  - データ解析の基礎知識と技能を持っている
  - 解析結果を報告できる

45

専門用語について話したり、  
考え方の式を板書して、  
90分間を埋めるのは  
とても、とても簡単なこと

でも学生が授業中に「なるほど」と  
納得するように伝えるのは  
とても、とても難しい

- 授業外に期待できる？
- テスト前の対策だけに頼っていない？

49

### 1年生はとても大切

学生は、  
私たちが持っているものを譲る相手、  
そして次の時代を託す相手

- よい授業環境を作り、維持することも私たちの仕事
- テクニカルな意味での初年次教育云々ではない

50

りません。教員が「どうせつままないけど、君たちに言ってもわかんないかもしれないけど」云々といっても仕方がないと思います。授業を90分使うなら、私たち自身が楽しまないといけないと思いますし、学生も楽しめるようにしないといけないと思っています。鍵山秀三郎さんはイエローハットの社長をされた人ですが、「来る人には楽しみを、帰る人には喜びを」という会社にしたとおっしゃっていました。私もそういう授業をつくりたいなと思っています。「次の授業が楽しみだな」と思ってもらうようにならないといけないなと思っています。

お話してきた通り結構バタバタしながらやっているのが実情で「うまくいかない」ということも多々あります。そのような中で、私の心の支えになったのはこの一言です。「教育は流れる水に筆で字を書くようなもの」。森信三先生は哲学者であり、教育者ですが、これを知って「偉い人も悩んでいるんだな」と、ずいぶん励みになりました。以上です。ありがとうございました。

#### 宿久洋 教授：

じゃあ、昔の話をしたと思います。300人の講義をしまして、その中で文理融合を意識して、できる限り学生に寄り添う立場でつくってきたつもりではあったんですね。世代間はあまり変わらないのですが、かなりギャップがあって大森先生の話聞いた時には、かなり懐疑的で、正直、失うものの多さの方を気にしていた。4コマ使っていますが、正味1.5コマくらいの知識投下の講義であれば、それに嵌まるものを4コマにして。我々の学部は、ありがたいことにリッチなコマ数を配置することが、

おもしろくない話を  
おもしろくなく話すほど  
おもしろくないことはない！

#### 楽しい授業

- ・「来る人には楽しみを、  
帰る人には喜びを」 鍵山 秀三郎

55

「教育は流れる水に  
筆で字を書くようなもの」  
森 信三

56

#### 謝辞

データサイエンス科目を支えてくださっている  
大田靖先生と藤木美江先生、  
ならびに私たちの科目運営を  
応援してくださっている  
文化情報学部の先生方に感謝いたします。

57



先生方にご理解いただいた上で、できていることがあり、今ではこのやり方が、よかったと思います。私自身は、当時、あまり講義に期待していなかったんですが、出席をとられたことはないですし、これだけ束縛されたら大学をいやになっていると思うんですね。私たちは「好きにさせてくれ。俺は勉強したい時はやるし、いやな時は行かない」という環境で育ってきたわけで、大学教員になった時も、指導の先生からは「誰でもわかるような講義はするな。努力をしないで教えて口に餌をつっこむような講義をしたってつまらない。モチベーションは学生が考えるので、そんな高尚なことは上から与えるな」という教えを受けてきた。それよりも自分としては学生に寄り添った講義をやっていたつもりですが、蓋を開けてみると、5%とか10%に満たない学生をターゲットにした講義をされていたかなと思うし、自分はそれを30%まで広げる講義をしたいと思った。しかし振り落とした方が、ほとんどだった、今から考えると。

今思えば、やっとそういう心境に変わったというか、4年続けてきて3、4年生に上がってきて、最初にもっていた今の3回生と比べて、どちらがいいか、「今の3回生がいいです」と自信をもって言える。「このやり方の方がよかった」と。私も最初はギャップがあったんだというのが今の心境です。ただ教員に負担がかかっています。大森先生は毎年、資料を変えられて、これはものすごいエネルギーです。他にもたくさん人間がかかわって、やっと成り立っている講義で、これを全体ではできないので、初年次、リテラシーのところできっちりやって、その後、積みば、4年生までいくとトータル知識量は減らないというのが今の認識です。そういうコメントです。

## 大教室での参加型授業の試み 教えるより、学び合う場を創ろう！

政策学部 中野民夫

中野民夫 教授：

今日は参加型授業、それも大人数の大教室で参加型授業ができるかという試みをしていますので、そのお話をさせていただきます。「教えるより、学び合う場を創ろう！」という気持ちでやっています。余談ですが、毎朝、日の出前から鴨川を歩いて朝日に向かってヨガをしています。東京から2年半前に京都にきました。京都、すばらしいなと思っております。自己紹介ですが、ソーシャ



ルイノベーションコースを中心にしていますが、2年半前までは博報堂という広告会社に30年ほど勤務していました。いろんな仕事をやりましたが、後半は社会テーマといわれる環境とかNGO、CSRとか、市民参加でまちづくりとかやっておりました。90年前後に会社を2年8カ月も休職させていただき、アメリカに留学していたこともあり、そこで平和や環境に関するワークショップに出会って、こういう学びの場があるのかという感銘を受けて戻ってきてから二足の草鞋をやっていました。2001年に『ワークショップ』という新書を出す機会がありまして、多くの人に読んでいただいて、全国さまざまな形のところに呼ばれて参加型の場づくりをやってきました。屋久島が好きで、ここで立教の大学院の集中講座をやっていますが、人と人、人と自然、人と自分がつながり直すような道場として使っております。あとは環境教育、ファシリテーション、京都でもImpact Hubにかかわっています。著作はワークショップとかファシリテーションに関するものがありますが、最近では鴨川の朝の修行をもとに『みんなの楽しい修行』をつくっています。

2001年の『ワークショップ—新しい学びと創造の場』は、当時まだ全体を書いている本が少なく、かなり多くの方に読んでいただいたロングセラーになり、16刷で7、8万部出ております。

今日の目的は「大教室での参加型授業の試み」を紹介すること。それはワークショップやファシリテーションを応用しております。参考までに、ワークショップというのは「体験型の新しい学びと創造の場」だと思っています。もともと英語の“workshop”

授業デザイン研究会


**大教室での参加型授業の試み**  
教えるより、学び合う場を創ろう！

2014年12月12日

政策学部  
中野民夫

1

## 自己紹介



- 同志社大学政策学部・大学院総合政策科学研究科  
ソーシャルイノベーションコース教授  
- テーマ:「至福の追求と社会変革」、参加型授業を実践
- 02年3月まで、(株)博報堂に30年勤務  
- 大阪の営業から様々な職種を経験。後半は、愛知万博「地球市民村」など、環境・NGO・市民参加・CSRなど社会テーマ系を担当。
- ワークショップ企画プロデューサー  
- 90年前後にアメリカ留学。01年『ワークショップ』(岩波新書)出版から。  
- 市民活動、NPO/NGO、企業、行政、研修、学校教育、環境教育等で活動
- 屋久島「本然庵」庵主  
- 本来の自然に戻る道場。人と人・自然・自分自身がつながり直す場。
- 公益社団法人日本環境教育フォーラム理事、NPO日本ファシリテーション協会フェロー、Impact Hub Kyotoコアメンバー

3

主な著作



16刷!

**ワークショップ**  
新しい学びと創造の場  
(岩波新書、2001)



8刷!

**ファシリテーション革命**  
参加型の場づくりの技法  
(岩波アクティブ新書、2003)



自分という自然に出会う  
(講義、講談社、2003)



4刷!

**ファシリテーション**  
実践から学ぶスラスラとこころ  
(共著、岩波書店、2009年)



**対話する力**  
ファシリテーター23の問い  
(共著、日経出版社、2009年)



New!

**みんなの楽しい修行**  
より納得できる人生と社会のために  
(善住社、2014年)



は「工房」とか「共同作業場」で一緒につくるところでした。ワークショップは「一緒につくる場」です。ファシリテーションはワークショップをつくり、回していく技法として発展してきた「参加型の場づくりの技法」です。“facilitate”は「促進する」とか、「ことを容易にする」ことです。アイデアとかビジョンをつくっていく、「共創」を促進することもあれば、会議とか紛争とか摩擦を調整しながら組織変革や、まちづくりにつなげていくということもある「協働」の促進でもあります。いろいろ工夫してきて、この夏、追手門学院大学で話す時に、まとめたいなと思って8カ条をつくりました。8つくらいでまとめられたらと思っています。

ここ2年半、さまざまな試行錯誤をしてきました。ワークショップを社会人とやっていると、社会人は自分のお金と時間をかけてくるので、やる気があるし、20、30人くらいでやるが多かったのですが、大学で200人の大教室だとスマホを見ているとか、いきなり寝ているとか、最初はどうかと思ったんですが、昨年、180人、今年200人でNPO、NGO論をさせていただいて、いろいろ試みました。昨年は共同研究者で1人先生に入ってください、学生の立場で体験してもらい、TAを含めて3人でやっていました。できたことも多いのですが、今年はサポートがなくて、どこまでできるかと。受講生からボランティアを募ってサポートしてもらって何とかかなるということを確認してきました。しばらくこの授業のことを追いますので皆さん、授業に出ているつもりになって聞いていただければと思います。(矢印になっているところは今日のための解説です。)

## 今日の目的

- 「大教室での参加型授業の試み」を紹介
  - 教えるより参加者同士が学び合う場を創りたい!
  - ワークショップやファシリテーションの応用
- \*参考
  - ワークショップ＝「参加体験型の新しい学びと創造の場」
    - Workshop:「工房」共同作業場→「一緒につくるところ」
  - ファシリテーション＝「参加型の場づくりの技法」
    - facilitate:「促進する」「<事>を容易にする」
    - アイデア創出、ビジョンづくり、政策づくりなど。共創促進。
    - 会議やワークショップ、組織変革やまちづくり。協働促進。

5

## 【最初に結論】 大教室での参加型授業の工夫8ヶ条

中野民夫(2014.6.23)

1. 教室の席は扉でくじを引く、少人数のグループ作る。
2. オリエン後チェックインから始めます。横に坐る子ども人々?
3. 専門の勉強以前に「人生」に、焦点あてて生きる意欲を。
4. 学生の中にいるいるやってる子、スピーチ頼めば皆釘付け。
5. ひとしきり話を聴いたらグループで、気づきや発見話し合う。
6. 全体で質疑応答シェアリング。決してあてずじっと待つ。
7. 出席は100%今ここに、私語スマホ読書居眠り許しません。
8. 最後にはフィードバックを集めます。きっちり読んで次につなごう。

6

## NGO・NPO論のねらい

### 1. NGO・NPOについて学ぶ

- 具体的に十人の生き方として
- 自分の「ほっとけない」は何だろう?
- 自らNPOを作ってみよう!

### 2. 大教室での参加型授業の試み

- 受動的に聞くだけでは、忘れやすいし、主体性が育まれない。
  - ワークショップ(一緒に作る工房)の応用
  - 自ら調べ、まとめ、少人数で話しあい、学びあう。
- \*座り方の工夫が必要。積極的に協力を!

9

第1回、4月に最初のオリエンテーションです。ねらいについては、NPO、NGOについて学ぶのはもちろんですが、それを極力、具体的に学ぶ。また、人の生き方、NGOで働く人たちに学ぶ。非営利組織には、国境なき医師団から地域のまちづくり、川の自然を守るとかいろんなものがありますが、そこにかかわっている人を通して学ぶ。NGOの人たちは「ほっとけない」ことを本当に行動に移している人だと思うので、「自分がほっとけないことは何だろう。自分のNGOをつくってみよう」というところまで最後はいこうとしています。

もう一つの柱が「大教室で参加型授業の試み」。受動的に聴くだけでは忘れやすい、主体性が生まれないので、ワークショップを応用して自ら調べ、自らまとめて少人数で話し合い、学び合う。そのためには座り方の工夫が必要で積極的に協力してくださいということで始めます。

最初に「はじめに質問です」とNGO、NPOをどれくらい認識しているか。すでに所属して活動している学生もおりますが、ほとんど知らない人が多い。手を挙げてもらうことで教室にいる人がどういう人間がいるかを互いにわかっていく。こういう手挙げ、世論調査、旗揚げセッションと言っていますが、最初にざっくり様子を掴む。この授業をとったわけ。興味があってきたのか、単位のためなのか、噂を聞いてきたとかを確認したりしています。

それからアジェンダ、流れを話します。まず自分の紹介、特にNGOとの関係で信頼関係をつくる。「この人はNGOを知っているのね」ということをわかってもらう。NGO、NPOは最小限の基礎知識だけ話す。どうしても聞いたことは忘れるので、なるべく具体的に語ろうということで、春にフィリピンとタイのNGOの仲間を訪ねましたので、写真をつけて見せました。

### はじめに質問です。

- Q1:「NGO・NPO」認識度
  - ①すでに所属し、活動している。
  - ②この言葉を一応説明できる。
  - ③なんとなくは知っている。
  - ④ほとんど知らない。
- Q2:この授業を取ったわけ
  - ①NGO・NPOに興味があって
  - ②単位のため
  - ③「楽だ」という噂を聞いて
  - ④講師や進め方に興味があって

→\*手上げ世論調査で、互いに全体の様子を確認する。

10

### 今日の流れ (Agenda)

1. 中野民夫自己紹介
  - 特に、NGOとの関係など →\*まずは信頼関係づくりから
2. 「NGO・NPOとは？」
  - 最低限の基礎知識 →\*「聞いたことは忘れる」から
3. 春のアジアの旅から
  - \*なるべく具体例で語ろう
  - フィリピンとタイの事例紹介
4. 今後の授業の進め方
  - \*「参加」の心構えを確認
  - 大教室での「参加型」授業の試み

11

最後に、今後の授業の進め方で「参加の心構え」をきちんと話しています。NGO、NPOが、もともと何で、具体的にはこういう違いがあるという話は簡単にして、授業の最後は今後の進め方として、「参加型」と言っているのは受動的に聴くだけでなく、自ら問題意識をもって調べ、まとめて話し合う。企業では当然、こういう力が必要だ、という話です。少人数グループで話し合うことをたくさんやります。「来週からグループをつくります。これは必ず主体性やコミュニケーション力が育まれるよ」という話をします。

そしていきなり初回から宿題です。「NGO、NPOとは」を、「高校生に説明するとしたら、どんなふうにありますか？」と、書いてきてもらう。あとは具体例がないとわからないので、NPOを2つほど取り上げて「目的と主な活動を集めて持ち寄ろう」と。自分であてがなければ、僕が、いろいろ縁がある団体のリストを示します。「この宿題をもとに次に話し合いをしますからやってきてください」と最初から宿題を出します。これで落ちる学生もいます。成績の評価基準は、その場にいないとできない学びをやっている、出席が大事です。5点×15回で75点、フィードバックシートを毎回出してもらうので、これを出席簿に転記するのが大変な作業ですが、しっかり書いてもらっています。内容をフィードバックすることはもちろんですが。あとはレポート。

翌週くると入り口に何やら配られる。前のスクリーンにはこんな図が出ていまして、出席票を配るんですが、右上に数字があって「ここか」と、この図を頼りにいくんで

## 今後の進め方

\* 授業の最後に

- 大教室での参加型授業の試み
  - 学習支援・教育開発センターの教育方法・教材開発プロジェクトに
- 参加型＝受動的に聞くだけでなく、自ら問題意識を持ち、調べ、まとめ、発表し、話し合う。
  - 積極的な参加を！対話の難しさと楽しさ
- 少人数グループで話し合う
  - 来週くじ引きで、4～5人のグループを作ります。
- 主体性とコミュニケーション力が育まれる。

13

## 次回までの宿題

→基本的に宿題あり、それを元に話し合う

- ミニレポート (A4、1枚) → プリントアウト5枚 (小グループで配る+提出)
  - 1) 「NGO、NPOとは？」
    - 定義、種類や活動領域、特徴など、(高校生に)簡単に説明するなら。
  - 2) 具体的な団体を2つ程取り上げ、概要(目的と主な活動)を調べて、まとめる。
    - 例: タイのアフ・アリ・プロジェクト、フィリピンのCGN
    - 日本環境教育フォーラム(JEEP)、WWF-J、日本野鳥の会、日本自然保護協会、グリーンピース・ジャパン
    - 世界の子ども児童労働から守るNGO・ACE、国際協力NGOセンター(JANIC)、日本国際ボランティアセンター(JVC)、シャブナール市民による海外協力会の会、シャンティ国際ボランティア会、開発教育協会(DEAR)
    - 持続可能な開発のための教育の10年推進会議(ESD-J)
    - FAJ(日本ファンリテーション協会)
    - ミラツク(西村勇也)、ホームズビー(高村賢州)、きょうとNPOセンター(田口美紀)、京都府府民生活部府民力推進課(鈴木課長)
    - ナマケモノ倶楽部、霧と風の学校(岩手・百成信夫)、フリーキッズ・ヴァレッジ(岩谷孝子)、フリースクールTOEC(徳島、伊勢達郎)
    - その他、自由に

14

## 成績評価基準

「大変だけど、ためになった！」を目指して！

- 平常点：75% (各回5点×15回)
  - 出席、宿題、積極的な参加
  - 毎回、フィードバックシート(感想、気づき、発見)を提出
- 小レポート：15%
  - ゲストのあとに、学んだことをミニレポートに
  - 数回 → \*実際は中間レポート1回
- 期末レポート：10%
  - 「私のNPO」について

15

すね。ここに番号札を置いたり、いろいろ準備が必要で、その前の授業があって大変だったりします。15分の間にどこまで段取れるか。小グループは、「真ん中が空いている人たち、そちらに膝を入れて後ろを振り返ってください。あら不思議、5人組ができます」と途中でやったりします。

2回目もそうやって始めるわけですが、必ず前回の最後に集めたフィードバックシートを、時間がかかりますが一生懸命まとめて冒頭に「皆さん、前の授業をこんなふうに取り受けていたみたいですね」と返します。「参加型授業への期待と不安」とか「NPOがちょっと面白そうになった」とか「旅の話に興味があった」とか。タイと一緒にいった学生がいたので「ちょっと前で話してよ」というと結構、いい話をしてくれたので、「同回生が旅に行ったり人前で話をしたりして、すごいな」と刺激を受ける。「博報堂についての話を聴きたい」とか。

2回目も流れを話します。「グループワークをやりまよ」と。自己紹介の前に、どこの誰で、これをとったわけとか、期待と不安とか、ちょっとほぐし的なものを作ってからグループワーク2の本題のNPO、NGOについて自分で、どう書いてきたとか、調べた団体について話し合うということでシェアしあうわけです。先程の2人の人が、中を向いて後ろを振り返って5人組になる。「このグループでやります。何かのご縁ですから、お互いに関心をもってどうぞよろしくと自己紹介からやりましょう」と。時間を預けると、パツと終わってしまったり、逆に長い人がいたりするので、1人2分ずつ細かく合図して

出席票(フィードバックシート)に記載の番号(○-△)を \* 第2回  
探し着席してください。(○=列、△=左からの番号) 冒頭  
前から1列~20列(緑のポストイット)、左から1番~14番です。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
1列	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2列	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3列	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4列	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5列	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6列	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
~														
20列														

まず、前回のフィードバックシートから  
→ \* 一生懸命読んでまとめ、冒頭に返す

- 参加型授業への期待と不安。  
- 楽しみ! vs 人前で話すの苦手
- NGO・NPOについて関心が高まった。  
- 知らなかった~関心あった~活動してる~今春行きた! → \* 実際に活動してる人を前に呼んで話してもらったり。
- 旅、海外への興味が。  
- 行ってみたいとわからない?  
- 同回生が、旅に行ったり、人前でちゃんと話せてすごい! → \* 春にタイの奥地に一緒にいった学生が話した。
- 先生の話、博報堂についても聞きたい。  
- 若干ですが、中野のサクセス、歌に期待 → 昨年の授業から
- 資料は先に配って、など

今日の流れ (Agenda)

1. 復習とフィードバックシートから
2. グループワークその1: 自己紹介  
どこの誰、取ったわけ(NPOへの関心)、期待と不安
3. グループワークその2・3: 宿題の課題1・2  
・「NGO・NPOとは?」 → \* 自分で書いてみないと  
・具体的に調べた団体について → \* 調べた者しか詳しくなれない  
・感想のシェアリングやQ&A → \* 話し合い(対話)の機会を
4. 次回に向けて



やります。

それから「NGO、NPOとは？」について書いてきたことを1人ずつ読んで一巡した後、「共通するところは何だろう？」とか「わかんないところは何だろう？」というのを出示してもらいます。それから「一度全体で意見交換しましょう」と全体に聞きます。ここでなかなか手が挙がりません。4、5人だと盛り上がるのですが、何百人になると、なかなか手が挙がらないのですが、ここは「あてない主義」で頑張ります。

具体的な団体を手分けして調べてきているので、自分は2つしか調べてなくても、5人いると10のNGOのことを知れるので「こんなに多彩なのか」とわかったりします。一通り終わったら自由に話し合ってもらいます。こうしてワイワイ始まっていきます。クジで席を決めていますから、前からビシッと埋まるんですね。ゲストの人がきて「大教室で1番前から学生が座っているのを初めてみました」と驚いていました。次回に向けて。僕が博報堂でやった愛知万博の「地球市民村」というNGOヴィレッジがあったので、その話をします。予習として参加団体を調べようと。30のユニットがあったので手分けしてもらいます。

### グループワークその1 自己紹介

- 奇数列の二人は中側に向けて後ろを振り返り、偶数列の3人と、5人組を作って下さい。
- このグループでしばらく一緒に学びあいます。  
- 何かのご縁。お互いに関心をもってどうぞよろしく。
- まずは、自己紹介(10分=一人2分。計ります)  
- ①どこの誰:出身やサークル、ゼミなど。名前。  
- ②この授業をとったわけ:NPOへの関心具合も  
- ③この授業への期待と不安

21

### グループワークその2 NGO・NPOとは?(15分)

- 課題1)「NGO、NPOとは？」の相互発表  
- 各自が書いてきたことを、順に一人ずつ、紹介してください。
- 「共通する特徴」は？  
- 一巡したあと、「NGO、NPOとは？」について、皆のまとめの中にも共通して出てくる、「特徴」は何か、話し合ってください。
- 一度全体で、意見交換、Q&A  
- →\*手が上がらなくても絶対に当てません！待ちます。

23

### グループワークその3 具体的なNGO・NPO紹介(30分)

- 課題2)「具体的な団体」調べ相互発表  
- 一人ずつ、まずは一団体ずつ紹介しあいましょう。  
- 一巡したら、二つ目を紹介。  
- わかりにくい点があったら、即、質問を！
- シェアリング(わかちあい)  
- どんな団体がありましたか？どんな感想を持ち、どんな気づきや発見がありましたか？  
- 一通り、紹介が終わったら、自由にやりとり。
- 全体でやりとり

24



### 前回のフィードバックシートから

- 参加型・小グループでの話し合い
  - 初めは緊張したが、楽しかった！ vs お遊び？
  - 皆優しく、いいグループだった vs 盛り上がりず
    - ・ →一人ひとりがグループのかけがえのない一員
    - ・ →雰囲気は自分が創る→世界は自分が創る！ →\* 力説！
- 多様なNGO・NPOのことを知れてよかった。
  - 本当に様々な団体がある。。。頑張ってる人も！
  - NGOの金銭面、運営は？
- 自分で調べ、書き、説明したので身になった。
  - 皆がよく調べていたので、刺激された。→\*これこれ！

28

### 今日の流れ (Agenda)

1. フィードバックシートから
2. グループワーク①: NGO・NPO調べ①
  1. チェックイン: 今どんな感じ？身体と心の調子、近況。→\*
  2. 愛知万博「地球市民村」参加団体、まず1団体
3. 地球市民村(NGO Global Village)について
  1. 映像～概要と成果について →\* 珍しくバワボでプレゼン
4. グループワーク②: NGO・NPO調べ②
  1. もう1団体
5. 次回に向けて
  1. NGO/NPOについて気にかけてみよう！世の中に満ちている。

29

3回目もフィードバックシートから始めていきます。自分で調べてレポートに書くのは面倒くさいのですが、やれば当然、自分のものになる。その日も今日の流れを話していきます。20、30分以上話す寝るといのが、よくわかるので、20分で止めては「ここまで聞いてどんなことが印象に残りましたか、何かわからないことはありますか、さっきのグループで話し合ってください、どうぞ」という形で何分か渡したり、行ったり来たりしています。こういう感じで積み重ねていきました。

これは今年最後の「私のNPO」の発表の場ですが、尋真館の大教室で全部机を寄せて、15分の休み時間で戻す作業を、「まずはこの列の人、立ち上がって動かしましょう」などと段取って可能にしました。全部寄せて、また戻す。次の授業があるので。でも、できるようになりました。椅子だけで集まるんですが、新兵器がありまして、「えんたくん」、直径1メートルの丸いダンボールで商品化されています。「対話」というのがワークショップ業界で結構話題でして、対話づくりをあちこちでやっています。ワールドカフェという手法が有名ですが、丸いテーブルが理想的ですが、そんなにあるわけではない。「えんたくん」は、椅子だけで円卓ができて、その上に模造紙を丸く切った

Z40の机を両脇に寄せて椅子のみの空間へ  
えんたくん(直径1mの段ボール)を投入



「えんたくん」(直径1mの段ボール)と丸い再生紙を  
膝の上に置くと円卓に！ マーカーでメモしながら話す。





のがあって、そこにどんどんキーワードを書いていく。言ったことは霧散して消えちゃうので、どんどん落書きしながら見える化して話そうと。皆がマーカーを持って、自分のアイデアを書きながらやっています。

これも去年の政策トピックス。130人くらいでしたが、この時はまだ机を動かさずに「奇数列と偶数列に分け、奇数列の人、うしろを振り返ってください」と、2人ずつの配置で偶数列に円卓をおいて前の人に振り返ってもらうと、かなり円卓に近い雰囲気ことができました。

少人数クラスは政策学部でFYEとかアカデミックスキルで十数人があるのですが、最初、後ろの机を避けて十数人みんなで輪になってチェックイン、「今どんな感じ？ 身体や心の調子や1週間で何か起こったトピックスを話そう」と。必ず全員が一言話してから授業を始める。最後もその日に学んだことを少しディスカッションする時間を輪になってやります。相互的なやりとりを生むには形が大事なので、教室の中でこういう場をつくっています。いかに学校の教育が双方向の学びではなく、されてきたかがよくわかります。自由に机を動かせる教室がほしいと言っても、ほとんどないですから。いかに一方的な知識伝達がスタンダードだったかよくわかります。

大学院でも、皆で椅子を動かして輪をつくったり、グループでディスカッションするアイランド形式の形をつくったりします。皆で共有するには、小さい工夫ですが、「この輪を花びらみたいに真ん中に寄せて周りに広がるように並べかえてください」と。動かすと手間はかからないですが、すごく一体感が出て話しやす

別の授業風景 2013年11月21日、約130名  
政策トピックス:「至福の追求と社会変革」第8回  
「ワールド・カフェ」(一番問い合いたい問いは?)等で対話)



36

少人数クラスでは、最初(チェックイン)と最後(自由な対話)は全員で輪になって話す。(2014年6月12日FYE)



38

小グループで学びあう  
(机を散らすアイランド型)



い。常に今、どんな形にしたら皆が話しやすいかを考えながら次を段取っています。

そこでこんなことを繰り返しながらまとめてきたのが、この8カ条です。

1、教室の席は扉でくじを引き、少人数のグループ作る。2、オリエン後チェックインから始めます。横に座る子ども人？ 3、専門の勉強以前に「人生」に、焦点あてて生きる意欲を。4、学生の中にいるいる、やってる子、スピーチ頼めば皆釘付け。5、ひとしきり話を聴いたらグループで、気づきや発見話し合う。6、全体で質疑応答シェアリング、決してあてずにじっと待つ。7、出席は100%今ここに、私語スマホ読書居眠り許しません。8、最後にはフィードバックを集めます。きっちり読んで次につなごう。

最初の、教室の席は扉でくじを引き、少人数のグループを作る。これは座り方の工夫、場づくりの事です。大教室、放っておくと後ろと周りが埋まって前はがら空きになります。ゲストが来ても申し訳ない感じがします。友達と来れば、ついおしゃべりも出てしまいます。学生に聞いてみると同じ学部でも少数の友達と話すが、知らない人とちゃんと話す機会は少ない。

そこでくじで座席指定して、知らない人と隣同士になる。前からぎっしり濃密な空間ができます。「何かのご縁ですからこの出会いを大切にしましょう」と期待を高めて新たな予感を醸成しています。初めての人とコミュニケーションをとることは、よい緊張感で、最初は抵抗があっても、こういうことが大事だと皆、わかってきます。何よりも多様な人、多様な考え方に出会って刺激し、学び合う。「こんな考え

各グループの発表や全体対話は、花弁型に並べて話しやすい工夫を



### 大教室での参加型授業の工夫8ヶ条

2014.6.23中野民夫作成

1. 教室の席は扉でくじを引き、少人数のグループ作る。
2. オリエン後チェックインから始めます。横に坐る子ども人？
3. 専門の勉強以前に「人生」に、焦点あてて生きる意欲を。
4. 学生の中にいるいるやってる子、スピーチ頼めば皆釘付け。
5. ひとしきり話を聴いたらグループで、気づきや発見話し合う。
6. 全体で質疑応答シェアリング、決してあてずにじっと待つ。
7. 出席は100%今ここに、私語スマホ読書居眠り許しません。
8. 最後にはフィードバックを集めます。きっちり読んで次につなごう。

43

### 1. 坐り方の工夫(場づくり)

「教室の席は扉でくじを引き、少人数のグループ作る」

- 大教室、どこから坐りますか？
  - 後ろと横から埋まり、前はがら空き、寂しいな。
  - 友だちと一緒にくれば、ついおしゃべりも。
  - 知らない人と出会ったり話す機会、とても少ない。

- ↓
- 「くじ」で座席を指定して、知らない人と隣同士に
    - 前からぎっしり濃密空間。何かのご縁、新たな予感。
    - 初めての人とコミュニケーション、良い緊張感。
    - 多様な人と考え方に出会い、刺激し学び合う。

44





方があったのか」と皆、興奮します。

少しは楽しくやろうと思って、パーティグッズのくじの箱を買ってきて座席札を入れてひいてもらう。こちらは机札です。机札と座席札、前からと左から番号を振って「3-8だったらどこ」とやっています。前に座席表を映写しないと混乱しますので、全体像が見えるようにしています。ビジョンとマップが必要かなと。遊び心、偶然の出会い、トランプもよく使っています。3組のトランプを使えば、150人くらいまで対応できます。

5人組の小グループ。ワークショップでも机が動かせない時に考えついて結構、いいなと思っていましたが、教室でこれをやるとかなりうるさいのですね、ワンワンして。大学生は主体的でないところがあって、

両端の人が聞こえにくくても聴き合おうという姿勢が乏しいと離れていくんですね。これはよくないと思って4人にして、少し空間を空けたり。空間を空ける余裕もない大教室でぎっしりの場合、1テーブル3人のグループで「真ん中の人は背を思い切り引いて、横の人が中を見るようにしてやりましょう」とやっています。4人組は2人組でもインタビューしあって、その結果を4人にシェアしたり、かなり使いやすいです。教室をよく調べて、このへんは使いにくいし、見えにくいので消し



### くじのつくり方

- 机に置く「机札」と入口で引く「座席札」を用意
- 前から1、2、3、左から1、2、3と番号をふる
  - 例:「3-8」=前から3列目、左から8席目
  - 入口で引いた「座席札」の番号の机を探し着席。
- 前に座席表を大きく映写しないと混乱する。
  - 「絵」(vision)、「地図」(map)を見せると一目瞭然。
- 遊び心で「偶然(必然)の出会い」を演出！
  - パーティ用品、トランプの応用(4×13=52枚)

### 5人・4人・3人組の坐り方

**【5人組=2+3】**  
奇数列真ん中空ける。前の二人が中向いて、ふりかえれば、あら不思議、5人組！

**【4人組=2+2】**  
3人掛けに2人ずつ。2人ペアでも4人でも話せる。偶数列にえんたくん乗せれば最高。

**【3人組】**  
空席作れず机ごとに3人で。真ん中の人が背を引いて両側乗り出せば濃い関係。

トランプの席に座ってください。今日は4人組です。 例2: 4人組

	1 2 3	4 5 6	7 8 9	10 11 12
1列	♠	♠	♠	♠
2列	♠	♠	♠	♠
3列	♠	♠	♠	♠
4列	♠	♠	♠	♠
...	...	...	...	...
13列	♠	♠	♠	♠
新たな1列	♠	♠	♠	♠

たり、工夫しています。

**8カ条の2、オリエン後チェックインから始めます。横に座る子どんな人？**

まずはみんなが一言話す。「どんな人がどんな思いでここにいるの？」とお互いが気になるのではないのでしょうか。教員、前に立つ私たちもそうです。まずは1人ずつ声を出すことから始めようと。大教室では全員が一言ずつは無理ですから、

グループとか隣と、少人数グループなら全員でやったりしています。問いがあると話しやすい。「何でも自由に」というと戸惑ったり、時間がかかりますのでたとえば「今の気分は？」と。英語でワークショップを体験した時、「How do you feel?」という言い方があって「How do you think?」ではなくて「今、どんな感じ？」と身体や心の調子を話す。ワークショップは左脳だけではなく感性とか身体とかホリスティックな人間全体を扱うので、“feel”を大事にしたいので、それを踏まえた問いです。今週のトピックス、同じクラスだと1週間ごとに会っていますから「今週どうしていた？」と近況を聞く。「前回の話で印象に残っていることは？」と復習したりもします。効果は最初から自分が話すことで、場への参加意識が高まり、互いにどういう人が、どういう状態でそこにいるかがわかるので、安心して入っていけることがあります。

**3、専門の勉強以前に「人生」に、焦点あてて生きる意欲を。どう生きたいかを考えている年代ですので、よく「若者よ、旅せよ、恋せよ、大志を抱け」とよく言って自分の学生時代の悩みや旅の話をしています。NGO論の時は、なるべくNPOを自らつくった人や途中から企業を辞めてスタッフになっている人とか、いろんな人に来てもらって活動について**

半分、そしてなぜ本人が今、そこにいるのかというライフストーリーを半分、話してもらいます。正直、学生の反応は後半の方が響いていますが、そっちだけでもだめなので、バランスをとってやっています。

政策トピックスというのは僕のテーマである「至福の追求と社会変革」というのを

## 2. まずは皆が一言話す (場づくり2)

「オリエン後チェックインから始めます。横に座る子どんな人？」

- どんな人がどんな思いでここにいるの？
  - まずは、一人ずつ声を出すことから始めよう。
    - 大教室なら小グループやお隣と。少人数なら全員で。
- 「問い」があると話しやすい。
  - 「今の気分は？」(身体や心の調子) How do you feel now?
  - 「今週のトピックスは？」(近況) what's going on in your life?
  - 「先週のゲストで印象に残っていることは？」(復習)
- 効果
  - 自分から話すことで、場への参加意識が高まる。
  - お互いにどういう人が少しわかり、安心する。

50

## 3. どう生きたい？ (関心喚起)

「専門の勉強以前に「人生」に、焦点あてて生きる意欲を」

- 「若者よ、旅せよ、恋せよ、大志を抱け！」
  - 自分の学生時代からの悩みや旅の話
- NGO・NPO論
  - NPOを創った人やスタッフに来てもらい、活動について半分、そこに至るライフストーリー半分。生き方に反応大！
- 政策トピックス:「至福の追求と社会変革」
  - “Follow your bliss!” by Joseph Campbell
  - 気になること、気を惹かれることについてこうよ
- アカデミックスキル読解: 生きる意味を巡って
  - 『夜と霧』(ビクトール・フランクル)を共に読み込み、対話
- FYE(First Year Experience)
  - 少人数の対話を重ね、大学時代にやりたいことを明確に。

51



やっています。もともとのきっかけがジョセフ・キャンベルという神話学者が“Follow Your Bliss”という「自分の至福についていきなさい」と若者たちに言っているのに影響されているんですが、気になること、気を惹かれることについていこうよと、それが本人を元気にするだけでなく、きっと周りの人にもいい影響もあって、そういう「自動詞の連鎖」の中で社会が自ずから少し変わる、そんなことがあるんじゃないかということだけしかけています。どうしても周りを気にしたり、親とか先生とか、その意向を生きてきた高校時代があるので、「ほんとに自分の身体や心が喜ぶことを大事にしてみようよ」とけしかけています。

アカデミックスキルでは「読解」というテーマですが、副題を「生きる意味をめぐって」として、アウシュヴィッツ強制収容所などを生き延びたフランクルの『夜と霧』という名著をかなり濃く読み込んでいます。シラバスでこういうことを書いているので、それぞれいろいろ悩みをもって困難を抱えている学生がきてくれて、とても濃い授業になっています。あと政策学部はFYEという最初の少人数の授業があります。学ぶというより少人数の対話を重ねて大学時代にやりたいことを明確にしていくことを主にしています。

4番目、学生の中にいるいる、やってる子、スピーチ頼めば皆釘付け。学生にチャンスをつくることです。NGO論で、1年間、休職してNGOでフルボランティアをやっていた人が2人いて、「ちょっと話してみよ」と頼んだところ、とても面白いので、皆、釘付けになりました。プレゼンがうまい、外で鍛えられてきている人たちは。その味をしめまして「次はどなた？」と少し探しながらやる中で、200人もいると何人かいるので、フィードバックシートを見て「自分もNGOのスタディツアーに行っていた」という人を次にインタビューしたりしました。同世代の見事なプレゼンと行動力が非常に刺激になっています。我々中高年のオヤジの役割は、若者にチャンスをつくって任せることと、よく思うんですが、本当にそうだなと思います。

このようにフィードバックシートやレポートがユニークな学生をちょっと引っ張ってきたり、オープンマイクの時間をつくってインドの旅をしてきた学生が報告したり、自分が関わっているイベントを紹介する時間をつくったりしています。一時、シンガー

#### 4. 学生にチャンスをも！ (機会提供)

「学生の中にいるいるやってる子、スピーチ頼めば皆釘付け」

- NGO論で学生に体験談を頼んだら大ヒット
  - 休学してTeach for Japanで専従やってきたI君
  - 休学し東京でUNHCRやJVCでインターンしたTさん
  - 春休みにスタディツアーでフィリピン行ったJさん
- 同年代の見事なプレゼンと行動力が刺激に
- オヤジの役割は「若者にチャンスを創って任せること」?
  - フィードバックシートやレポートがユニークな子を前へ
  - オープンマイクで、インドの旅報告や催事紹介など
  - オープニングミュージック、音楽演奏の機会を

52

ソングライターの大学院生がアシスタントをやっていたので最初に音楽をやる時もあるって、それをオープンにしたところ、すごくうまい学生が歌を聴かせてくれたりしたこともありました。

**5番目。ひとしきり話を聴いたらグループで、気づきや発見話し合う。**20分も一方的に話すとは寝てしまう。ならば話は短く切って、小グループで、ここまで聞いて印象に残ったこと、聞きたいこと等で話し合う「ぺちゃくちゃタイム」をします。聞いてないとパッと問われた時、話せませんし、話していれば眠くならない、さまざまな対話の機会を授業の中に入れます。毎回、チェックインや、宿題を出して発表しあう。資料を手分けして20分読んでポイントをまとめて話し合うなど。フィードバックシートは最後に書くのですが、僕だけ受け取るのはもったいないので、時間内に書いてシェアしあってから終了というやり方もしています。

**6番目。全体で質疑応答シェアリング、決してあてずにじっと待つ。**これは大人数では難しいです、なかなか手が挙がらない。少人数から積み上げていけばと思うんですが、なかなか出ません。周りが出てくるか、空気を読み合う文化で同調圧力が強い。だからといって教師が「はい、君」とあててしまったら、もうわざわざ手を挙げる気がなくなるのではないかと

思います。あてる教育が日本の教育の主体性を損なってきたことのひとつではないかというくらい思っていて、「僕は絶対にあてません、手が挙がらなかったら、残念だけど、先にいきます」と宣言します。あてれば皆、立派なことを言いますし、書かせれば、もっと立派なことを書くのはよくわかるんですけど、少しはある種、リスクをおかして自分の想いを人前で話す体験を積んでほしいので「あてません」という待ちます、3秒ではなく10秒くらいは確実に待ちます。30秒くらい待つ時もあります。でもほんとに挙がらない時は「残念だな。考えてないわけじゃないだろうにな」と言っ

### 5. 横の対話を促す (対話促進)

「ひとしきり話を聴いたらグループで、気づきや発見話し合う」

- 20分も一方的に話すとは寝てしまう。
- ならば、話は短く切り、小グループで、「ここまで聞いて印象に残ったこと、もっと聞きたいことは？」等で話し合う。(ぺちゃくちゃタイム)
  - 聴いてないと話せない。話してれば眠くならない。
- 様々な対話の機会を
  - 毎回最初はチェックイン。近況や今の気分。
  - 宿題を出し、まず小グループで発表しあう。
  - その場で資料を手分けして読み、報告し合う。
  - フィードバックシートを書いて、シェアし合って終了。

53

### 6. あてない主義 (自主性尊重)

「全体で質疑応答シェアリング、決してあてずにじっと待つ」

- 大人数では、なかなか手が上がらない。
  - 周りがどう出るか空気を読み合う文化、同調圧力
- だからといって、教師があててしまったら、もうわざわざ手を挙げる気はしなくなるのでは？
  - あてる教育が、主体性をそくなってきた！？
- 「ぼくは絶対にあてません。
  - 手が上がらなかったら、残念だけど、先に行きます」と宣言。あてれば、書かせれば、意見あるのは承知。
- しばらく無言で待つ。1、2、・・・10以上。
  - 上がらなかったら本当に先に行って、悔しがらせる。
- 最近は3~4人グループを2~3集めて中グループも。

54

て「じゃ先にいきます」と言って悔しがらせます。いきなり少人数から何十、何百というのは大変だというフィードバックもあって「中グループくらいにしてほしい」ということもあって「なるほど」ということで3つくらいのグループを集めて中グループにしたりします。椅子、机を動かさないといけないので、自由なレイアウトができる時のみ、やっています。

**7番、出席は100%今ここに、私語スマホ読書居眠り許しません。困った常識、どうしましょう。ここはほんとに皆さんとお話したいことです。「教室は何するところ？」というくらい大教室は諦めている、先生も、学生も。学費を簡単に割ると相当、1授業にかかっていると思うんですが。特に企業にいながら非常勤講師を始めて仕事をやりくりしてって、い**

いきなり寝られたらカチンときていたんですね。「許せん」という感じで。私語は論外だけど、スマホとか読書、居眠りは迷惑をかけなければいいんでしょうみたいなところがあるのは非常に気持ちが悪い。先生も諦めているし、学生も出席重視だと、そうなるけど、もったいない。特にうつ伏せて寝るのはどうしても許せない。うたた寝は眠らせる授業をしてしまったのかと深く自分にも問わないといけないんですけど、突っ伏して寝る、全くやる気がない態度を見せられると「聞く気がない人は出てください、人生は選択ですから」と。その心は「ここにいるなら100%、ここにしようよ」と。モラトリアム心理とか昔からありました。今ではない、いつかどこかで本当の自分が実現されるというのがずっと大人になっても続いている心理ですけど、それって、いつなんだろう。生きているのは常に今、ここなので、Be Here Nowという言葉もありますが、「いまここにいるんだったら、ここでできることをちゃんとやろうよ。選択だから他のことをしたいなら、ここじゃなく、そこに行ってちゃんとやろう」と、これはわりと徹底しています。やる気がある、やる気がないという話もあります。確かにグループの中でも、おしゃべりしたり、遅れてきたり、平気でやる学生もあるんですが、長くやっていると変わってきたりするので、諦めちゃいけないなと思って「やる気がない人はいない、やる気がない時があるだけ」と思いたいなと思って粘り強くやろうとしています。

**8番目。最後にはフィードバックを集めます。きっちり読んで次につなごう。出席**

### 7. 困った常識、どうしましょう？(学生心得)

「出席は100%今ここに、私語スマホ読書居眠り許しません」

- 教室は何するところ？(学費は1授業に約4,300円?)
  - こっちは本気でやってる。遅刻・居眠り、許せん!
- 私語は論外、スマホ・携帯、内職・読書はいいの?
  - 「迷惑かけなければ」と諦めていては、お互いによくない。
- うつぶして眠るのは、どうしても許せない。
  - うたた寝はともかく。「聞く気のない奴は外へ出ろ!」
- 「ここにいるなら、今ここに100%しようよ!」
  - モラトリアム心理。「(ここでない)いつかどこかで・・・」
  - それはいつ?生きているのは常に今ここ。Be Here Now!
- やる気ある人vsやる気ない人?
  - 「やる気がない人はいない。やる気がない時があるだけ」

55

確認を兼ねて小さいコメントシートを必ず書いてもらいます。「今日感じたこと、気づいたこと、発見したこと、講師への意見等フィードバックもよろしく」と。皆、立派なことを書く。最初の頃は一喜一憂していましたが、もう騙されんと思っ  
ていますが、提案は極力、授業デザインに生かしています。たとえば「おすすめの本を紹介して」という提案に対し、僕  
の話をするだけではもったいないから、12月のキャンドルナイトの時に、「自分が影響を受けた本をプレゼントし合おう」ということで全員がお互いに紹介し合ったりしています。また、もっとみんなで徹底的に話したいという時は、丸ごとワールドカフェで全部対話の時間にしてみたり。フィードバックは生命活動の要だと思しますので、何かやったら、そのフィードバックをもらって極力活かすように心がけています。

こういうことをやる時に思い出すのは、ファシリテーションの基本技が5つ、突き詰めていくとございます。

一の技、場づくり。日本の場合は空間だけでなく、雰囲気とか、人の心の関係性もありますので、それを踏まえたデザインが必要だと。二の技、グループサイズ。いろんな人数の特徴を活用しようと。三の技、問い。ファシリテーターや教師は何か問うわけですから、それは重要です。共通で触発的、身近で具体的で、裁かれない問い。「それはおかしいよ、間違ってる」といきなり言われなような、その人の体験とかから出発するようにしています。四の技、見える化。議論、もやもや見える形に定着させる。「えんたくん」とかで書きながらやるとか。これを含めて五の技。流れのあるプログラム・デザイン。人の身体と心の自然を踏まえた起

**8. フィードバック・ループ** (循環生成)  
「最後にはフィードバックを集めます。きっちり読んで次につなごう」

- 出席確認を兼ねて、小さなコメントシート提出  
- 200枚もあると、読むのも出席簿転記も大変だが
- 「今日、感じたこと、気づいたこと、発見したこと、講師への意見等、フィードバックをよろしく」  
- みんなお利口で立派なこと書く。寝てた子も？  
- 最初は一喜一憂していたけれど、もうだまされん。
- 提案は極力活かして、授業デザインに活かす。  
- 「本を紹介して」→キャンドルナイトで紹介し合う  
- 「皆でもっと話したい」→ワールドカフェ。  
- フィードバック・ループは、生命活動の要。

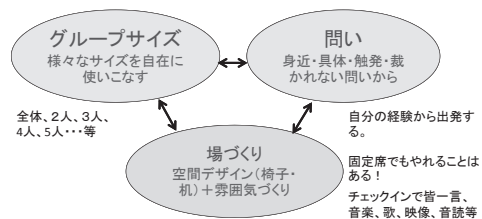
56

**参考**  
**ファシリテーションの基本技**

- 一の技：**場づくり**  
- 空間のデザイン+関係性のデザイン
- 二の技：**グループサイズ**  
- 小グループ(1、2、3、4、4~5人)の活用
- 三の技：**問い**  
- 共通で触発的、身近・具体・裁かれない問いから
- 四の技：**見える化**  
- 言葉、議論、もやもや見える形に定着させる
- 五の技：**流れのあるプログラム・デザイン**  
- 人の身体と心の自然をふまえた起承転結

57

「教える」から「学び合う場づくり」へ  
ファシリテーション3つの基本スキルの応用



58



承転結で授業もデザインしていきます。そういう形でグループサイズ、問い、場づくりを使いながら授業をやっています。

学生にとっての「参加型」授業の意義。最後の頃に参加型授業はどうだったかを書いてもらったことをまとめますと「多様な価値観に触れ、「世界」が広がった」というのが多い。考え方の違う他者から互いに学び合うんだと思います。「生身のコミュニケーション力上がる」「話すことの難しさと楽しさを体感」。最初は戸惑ったり、苦手だと思っている人が、「だけど楽しい、もっと頑張ろう、話せるようになった」と。授業でいいのは15回つきあえることです。社会人とワークショップをやると、その時で終わるんですが、15回あるので、ちゃんと変わっていくし、待てるということがあります。「主体性が生まれ、意欲も上がる」「自ら小さな一歩の手応えがある」。自分が話をして「どう思う？」と振ったら、すごく場が盛り上がり、嬉しかったとか、自分が場づくりにかかわっていくと、その反応が返ってくることに味をしめて、そこに何かを生み出そうとして意欲が上がってくる。そういう中で自ら行動したり、調べたりしていこうという主体性が育まれるなどと思っています。学び合う授業をやって学ぶことは楽しかったんだと目覚める。皆、生き生きしてきます。学生が生き生きして楽しそうだと、こっちも嬉しいわけです。

まとめ。ファシリテーションが拓く新たな大学像。ワークショップの世界にかかわってきて、教育界はファシリテーションの導入が最も遅れています。長い伝統があり、教室も、そういう形になっていないので、一緒に創り合うことから、かなり遠い世界が続いているような気がします。「今、大学は一体何をする場なのか？」と考えた時、知識を伝達したり、授受するだけなら、かなりネットからとれる時代になっています。なんでもちょっと検索すれば出てきてしまうし、eラーニングもあります。なんで生身の人間がわざわざ集まっているのか、その意味をもっと考えていく時代だと思います。僕なりの思い

#### 学生にとっての 「参加型」授業の意義

- 多様な価値観に触れ、「世界」が広がる！  
- 考え方の違う「他者」から、互いに学び合う。
- 生身のコミュニケーション力上がる！  
- 人と話すことの難しさと楽しさを体感。
- 主体性が生まれ、意欲も上がる！  
- 自らの小さな一歩の手応え。その好循環。
- 学び合う「楽しさ」に目覚める！  
- 皆、生き生きしてくる。学生も教員も。

59

#### まとめ ファシリテーションが拓く新たな大学像

- 今大学は一体何をする場なのか？  
- 知識だけだったら、ネットから取れる。  
- 生身の人間が、わざわざ集まっている意味は？
- 「対話」と「学び合い」の世界へ  
- 生身の対話、相互の刺激で、「生きること」と「学び合い」への意欲をこそ引き出すぞ！  
- そのとき、ワークショップやファシリテーションの活用はとても重要。
- 「教えるより、学び合う場を創ろう！」

60

は「対話」と「学び合い」の世界へ。生身の対話、相互の刺激で「生きること」と「学び合い」への意欲をこそ引き出そう。その時、ワークショップやファシリテーションの活用はとても重要になってくると思っています。「教える」より「学び合う」場を創ろうという気持ちでやっております。ありがとうございました。

## ディスカッション

**司会：**

それではこれから意見交換やディスカッションをさせていただきたいと思います。ご参加の先生方にお考えいただく時間の間に今日、お話をいただきました先生方に相互にどう思われたのか、ここは共通だったとか、ここはどうだったんですかと交換していただいて、その間に質問等をお考え願うということで。大森先生から。

**大森：**

中野先生のお話、大変勉強になりました。ありがとうございました。僕、「えんたくん」に興味をもって、ぜひ使ってみたいと思うのですが、お金はどうしているのかなということと、片づけをどうしているのかと気になったのですが。

**中野：**

重くはないのですが、大きいので大変です。タクシーにも乗りません。直接送ってもらった後は授業が良心館だったりするので、研究室から工夫して自転車のペダルにダンボールを乗っけて押して運んだり、大変苦勞しています。力もちの若い男性に担いでもらったり。結構ドタバタやっております。

使い捨てではないですから。普通のダンボールで紙だけは別で載せているんです、模造紙で。20枚と20枚のセット7000円くらいで、「えんたくん」で検索するとトップで三ヶ日紙工がやっています送ってもらうのはいいんだけど、動かすのが大変で、もっと小さいのをつくれとか折り畳み式とか試行錯誤しています。(→以後、折り畳み版ができました。)

**大森：**

なるほど。本当に大変勉強になりました。早速使いたいなと思います。あとは結構、考えていることが似ているなと思っていて多分、準備をものすごくされているんだな





ということ、話を聴きながら思いました。また、先生が、授業を楽しんでいらっしゃるんだというのが、よくわかった気がします。

**中野：**

コンテンツの準備よりも段取りの準備で、イベントやっているみたいな感じです。

**大森：**

同じですね。僕たちはグループをつくるにも、ここをこうしてとか、教室前にグループ表を貼って、そこに座ってねとやっています。

**中野：**

政策学部に来た時に「政策学入門」とか出てみたんです。どんなにいい話をしていてもやっぱり無理と。90分、話を集中しながら聴くのは無理で途中、カクツと眠けがきたし、ざわざわしてるし、こうならないようにするにはどうしようと思って。

**大森：**

僕も、そう思うんです。学生は朝からずっと教室にいて座っている。ずっと聴いているんですね。いや大変だろうなという気がして。

**中野：**

生活リズムがむちゃくちゃですから、寝ている時間も食べるものもひどいので、そこからやらなきゃと思いますよね。

**宿久：**

感銘を受けたとしか、言いようがないのですが、今は少なくともたくさんの院生とかを抱えているので、我々の学部には実習助手というシステムもありまして非常勤嘱託職員の形で何名か近隣の大学のドクターレベルの学生とかポスドクの方を雇ってサポートしてくれるんですね。たくさんのTAを入れてやるので力技をやろうとするとスタッフの力でやれるんですが、今はそれを、ほとんどお一人で回されている。

**中野：**

前の授業が終わる頃に教室に行って「ちょっとこれから番号札を置くから手伝って」と早く来ている学生に頼んでいるんですね。学生が前から置いていってくれている。去年はTAで固めていましたが、一緒につくるというので学生を引き込まないといけないと思って、今回はボランティアで、前の授業が空いていて熱心に手伝ってくれる3人が、くじを一緒につくったり、段取りをしています。彼らもやればやるだけ学びがあるので、こういう状況を整えてから、「どうぞ」という感じで扉をひらきます。

大学の先生方は専門のことはよく研究されてこられているのに、教え方についてはどこでトレーニングされたり、学ばれるんだろうかと。僕自身、ここへ来た時に何もオリエンもなく、放り出されて。ワークショップをやっていたので、できるだろうと思ったんですが、学部は最初はびっくりするくらいの姿勢で驚いたんです。お話を伺っていて「班に分けて」というのはいい、一緒にやったら寝ないし、楽しさも出てくる。どうやって班を分けるのかと気になって休み時間の時に伺って、いろいろ工夫されている、なるほどなど。今日はこういう場があっていいなど。試行錯誤を皆さん、やっていらっしゃると思うんです。それを共有して、もっとお互いが学び合える、教員同士が、という場がないと学生にもうまくできないよなど思ったりしました。

**フロア：**

グローバル・リソース・マネジメントで理工の担当をしています。教えた経験がなく、ユネスコの国際機関にいて20年ぶりに日本に戻ってきて、こちらでお世話になっています。理系ですが、先生がしゃべって、それだけというイメージがあったので、息子にも「日本の大学は面白くないから行くな」と言っていたんですが、今日のお話を聴いて嬉しく思いました。特に「教える知識を少なくする」、とてもすごいなと思いました。理工の学生から「インプットばかりでされていてアウトプットの機会がなく」というコメントを受けたことがあったので、20年ぶりの状況に感銘を受けました。このような機会を何度もつくっていただければと思います。

**フロア：**

社会学部です。大森先生のお話で「教える知識をいかに少なくするか」がポイントかなと思って、中野先生のお話で「大学は何をやる場所か?」。ある意味、すごくリアルな提案で、知識の伝達への重点を変えないと授業のあり方は変わらないだろうと。統計学ですと、かなり定まった体系があって「これだけ教えない」というものが



あった時、4時間のものを1.5時間になっていると。最終的にはほとんどになると。このやり方を導入する以前と以後で、統計学検定をとった人が何%とか違いが増えたのか、変わらないのか、下がったのかというデータはございますか？

**宿久：**

データは定量的なものに関しては、統計検定が始まってからこの講義を受けるようになってるので、1年秋学期に2級をとってしまうような伸びている学生もいれば、標準的にいうと1年生秋に3級くらい、2年生で2級くらいいけるくらいのカリキュラムにはなっています。今回は我々の学部が全国的にもリッチなカリキュラム体系をとっているんで、できているところがあります。全体の分量より、どのレベルをターゲットにしているか、もとの講義が上積みターゲットにしているんで、1期生は大学の助教級を何人も出しているような、他大学にも行っているという、手をかけた分だけ、そういう人たちもいます。今の学生たちがどうなっていくかはわかりません。ただ卒業研究の反応は当然、こちらがいいですし、最初にこれでいくとモチベーションが高いので、後から積まれても門前払いをする学生は確実に減ります。60%くらいはつかんでいるなというのが、私の主観ではあります。ただ上積みは吹きこぼれています。落ちこぼれが確実に出ていて気になっていますが、別の面で拾えていますので。我々が勝手に回っているわけではなく、学生たちはやっぱり見ている。そういう学生たちに声かけをやったり、2回生が声をかけてくれて、今年は1回生が勉強会にきているとか、1、2、3回生が同じ統計の勉強会にいるとか。そういう変化は出ています。定量的なことはこれから追いかけないといけないなところですよ。

**大森：**

どう変わったかはわかりませんが、レベルは変えていないんです。初めの年が終わって変えようと思ったとき、「難しすぎる」くらいなら「レベルを落そう」と思ったんですが、多分、レベルを落としても変わらないんですね。同じやり方を丁寧にやってもレベルを落としてもだめだろうということが、はじめの年にわかったことなんです。「レベルは落さなくていいんだ、丁寧にどこまでできるか」ということなので「余計なものを減らそう」という発想になりました。今は見ているTAが「羨ましい」と言ってくれるような授業をやってやろうじゃないかという気分でやっています。手は抜いてないし、大学院生にも楽しんでもらえるような授業をつくっているつもりです。

**宿久：**

普通だったら「これも教えます」というところを、より本質的に「こっちやね」というのをしっかり教えるという。「こっちの分はやればできるから自分でやりなさい」と。教科書でやれますので。今までは「これもやるし、これもやる」とやっていたんですけど。そこは僕から見ると今日のレジメも「惜しいな。プリントにあるのに、なぜ言わないの?」と、そこはグッとこらえて。半分に近いと思います。

**フロア：**

そうすると「カリキュラムを、いかにつくるか。何を教えるか」の見極めが大変ですよね。

**大森：**

その通りです。だから毎年変わっちゃうんです。

**フロア：**

社会学部です。中野先生はグループワーク分けにエネルギーを使ってされている。最初にグループワークを始めるのにグループを分ける作業が結構、大変だと。学生と先生の距離感でグループ分けをしようというのも躊躇いがあるかなと。自分の授業に出てくる学生を見ていると。躊躇いがある部分をどう克服されたのか。アドバイスがあれば。

**中野：**

自由に座っていて「隣の人と4、5人でグループをつくってください」といっても、ちゃんと動かないですね。平気で避けたり、一緒になっても言われた通り、話さなかったり。びっくりしたんです。だから最初に教室の入り口でやるしかない、そこまで準備してやっています。

**大森：**

僕はアイスブレイクが大切だなと思っています。グループ分けを、とにかくやってみようと思って「奇数列の人、後ろ向いてね。はい、4、5人で話してみよう」と。ノリがいいグループはアツという間にできるんです。気の合った人たちと。躊躇いがあるグループはノリが悪くて、私たちから何か言おうとしても、あまりうまくいかな



いんですね。だから話せる環境をつくるのが大切で、アイスブレイクは授業で学問の中身を教えるには何の役にも立たないけど、結果的にもものすごく役に立っているという気がします。

**フロア：**

大森先生達の授業でグループワークを入れられたのはいつからですか？

**宿久：**

初めからです。我々の学部はアドバイザークラスとして教員が何人か学生を持つというのがあって、アドバイザークラスで助け合うことができればいいなと思って、アドバイザークラスごとに初めからつくっています、グループ分けは。別の機会でもアドバイザーごとに会えるような仲間になっている。春学期はつくっていて、秋学期は学生に言っていませんが、春学期のテストの点数をソートしてバランスがとれるようにグループを組んでいます。いい点数の学生と悪い点数の学生がグループを組めるようにして「これでいこうね」とやっています。

**中野：**

50人くらいの授業があるんですけど、机を動かして最初は一つの輪になる。グループ分けする時は50人を3人ずつで割ると17グループができる。1から17の番号をかけて「同じ番号の人が集まって」と、その場でできる。機械的だけど、出会いの期待感を持たせてやるという、ある種、バサッとやらないと、なかなか難しいなと思っています。

**フロア：**

グローバル地域文化学部です。今回、学生たちに話させたり、発表させたりしていますが、グループは一回決めて固定にしていたので、飽きてきたり、うまくいかないこともある。毎回工夫してその場でグループをつくっていけば、うまくいくんだなと。アメリカの学会で発表した時、「時間が足りないのでディスカッションにしよう」となって。司会の人は何も準備してなくて院生の若手の人たちがいて、アメリカに留学しているような。その人たちは活発に議論を始めて、流れは司会の人がつくる。それでもできてしまうというのを見た時、先生がセッティングをして盛り上がるようにしてできるという、アクティブ・ラーニングなのかなと思います。それについての意

見をいただければ。

**中野：**

ちょっと状況がよくわからなかったんですが、アメリカでは放っておいてもできることが日本はこんなに手をかけないとできないのはいかがなものかと。まさにそうです。サンデル先生がきても日本では、あのようにならないですよ。ファシリテーションのジレンマは、場を整えれば整えるほど、育もうと思っていた主体性が、ファシリテートされることに慣れていくと、0から気づく力がなくなることです。ファシリテートしすぎは要注意となってくるんですが、最初は整えるが、だんだんゆるめていく。グループも最初は3回とか固定していくんですが、今はその場でつくったり、だんだんゆるめていく。最初は綿密に、ファシリテーションというよりもディレクション、それをゆるめていってファシリテーションして、最後は自ずから、みたいな場にしていきたいなと思っています。

**大森：**

フィードバックコメントの時に「グループを変えてください」ということがあるんです。だから変えたら、今度は学生から「頻繁に変えるのは、やめてくれ」とクレームがきてしまって、やめたというのがありますね。一旦、話せる環境をつくってしまえば他のグループにいてもそれができるんだという自信がつくんじゃないかと思うんですね。日本がだめだというのは、それに慣れてないということではないかという気がします。今日も宿久先生と一緒に授業をやってきましたんですけど、秋学期の第10回でも手が挙がって「あててくれ、あててくれ」で、我々の方がびっくりするくらいで、どうしてこんなになったのかなと。

**宿久：**

多少言いますとインセンティブはついているんです。挙げて指されると少しずつ点が乗かっていく。一つはグループに運命共同体的なものを与えてあげると「グループで全部終わったら流れ解散OKです」と僕は演習の時間にやるんだけど、1人じゃ帰しません。グループの学生が全部終わって帰るとか。固定のグループのよさ、助け合いで伸びていく、「グループで成長していきましょうね」というのも多少、仕組みとして入れている。ただ手が挙がるのではなく、挙げると少しはメリットがあるということで、なおかつ「なぜ指されないのですか？」というコメントがあって。満遍な



くやろうとすると、どうしても偏るので。多少雰囲気づくり、ゲーム的なところも1回生だとのって来て、ありがたいというところです。

**司会：**

ありがとうございました。お話がつきないと思いますが、今日、お話しいただいた中で、みなさま方の日頃の工夫に頭を悩ましておられる点、ご苦勞を、みなさまで情報共有ができたのではないかと考えています。今回初めてこういう形で開催させていただきましたが、今日きていただきました今出川校地、京田辺校地の先生方は私どものセンターにとりましては宝物のような先生方で、これを定期的に続けていって情報共有して、少しでもFDが進展してアクティブなラーニングが広がっていくように私どもも努力したいと思います。教室が動きにくいという話が出ていました。良心館の設計に途中からかかわって、教室が動かないな、せめて教室外で動けるようにラーニング・コモンズをつくりましょうと、執行部にもご支援をいただいて何とか授業外ではつくれたということですが、どんどん教室の中も変えていきたいと思いますという声も出てくるかと思しますので、こうした積み重ねを続けていきたいと思っています。

学習支援・教育開発センターの宣伝をさせていただきます。教育改善にかかわる資料などは学習支援・教育開発センターで購入して並べてお使いいただけるようにしております。リストはウェブ上にもありますので、ぜひお声かけをいただきたいと思います。今日は学内の情報共有のワークショップですが、学外で開催されているものにもどのようなものがあるかも、ウェブ上でアナウンスしています。ご希望があればセンターの方で旅費と参加費を負担させていただきます。そうした活動も行っておりますこと、先生方にお伝えさせていただきたいと思っています。

第1回の授業デザイン研究会でしたが、今後ご協力をいただきたいと思っています。それでは今日、お話しいただきました3名の先生方に拍手でお礼を申し上げて終了したいと思います。どうもありがとうございました。今出川校地、京田辺校地の先生方、ありがとうございました。